つなぐ

ふるさと宇和島／南予

春号
2024 No.26

ご自由にお取りください

特集 重要伝統的建造物群保存地区に選定された **岩松の魅力**

インタビュー「**ピンチはチャンス！**」 企業組合いわまつ 代表理事 兵頭 肇

つなぐ

2024 April
春号

トキワバイカツツジ（撮影／北濱一男）

Contents

01 エッセイ 「自分にできることをやるしかない！」 石口 孝治

02 インタビュー 企業組合いわまつ 代表理事 兵頭 肇 「ピンチはチャンス！」

05 撮り歩きなんよ 「萌え始めた中山池の水没林」 写真家 北濱 一男

06 特 集 重要伝統的建造物群保存地区に選定された 岩松の魅力
重要伝統的建造物群保存地区 津島町岩松の町並み 西澤昌平

08 岩松の町並みは別天地 松田厚子

10 獅子文六「てんやわんや」で津島を書く 松田厚子

11 「アカテガニ」がいる街 田村 裕子

12 全国有数の生息数を誇る 岩松川のうなぎ 小山 欽也

14 「町並み保存」で岩松は何を目指すのか・・・。 森田 浩二

16 食堂 こみつ 昭和の香りと響き 竹田 諭

18 文ちゃんとどつぼの予土線のあの人に会いたい 7 茶農家・俳人 川嶋健佑さん

20 いのちのはなし グーチョキパー 7 「いっぽ、いっぽ、またいっぽ Ⅱ」 毛利 弘子

21 南予の祭り歳時記 亥の子（南予地方全般） 愛媛県歴史文化博物館 専門学芸員 大本 敬久

22 宇和島の札所と遍路道 宇和島市教育委員会 安藤 裕之

24 医 療 「災害時の医療」 沖内科クリニック 副院長 沖 良隆

25 食めぐり 「宇和島 蒋淵の岩牡蠣について」 管理栄養士 柑橘ソムリエ シーフードマイスター 和田 広美

26 お気楽俳句 小野 更紗 ／ （絵）律川 エレキ ／ おすすめ本 岩崎書店

27 つなぐ美術館 べにばら画廊／アトリエぱれっと

28 うわしん若手経営塾OB 若おかみ ⑭ （株）ファインフードシステム 代表取締役 清家 葉子

29 斗酒百篇 ／ ４コマ漫画「きさいやくん」

表紙／「大あくび」
作 ／ ありま三なこ

プロフィール
1987年生まれ 愛媛県宇和島市出身
子供の頃から絵を描くことが好きで、大学の卒業制作で、しかけ絵本を作り、それから絵本に興味を持つ。2016 年第８回 be 絵本大賞受賞、絵本作家デビューを果たす
現在は個展やイベントへの出品等で活躍中

つなぐ春号 No.26
〒798-0041 宇和島市本町追手 2-8-21
0895-23-7000
年４回発行（季刊誌）
配布先 / 宇和島信用金庫各営業店ほか
発 行 / 宇和島信用金庫
編集・構成 / 業務推進部 広報文化室 川尻純滋

本誌掲載内容の無断転載を禁じます

令和6年は、元日から能登半島を襲った大地震から幕を開けました。たくさんの方々がお亡くなりになり、今なお避難を余儀なくされている多くの方々がおられます。お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りするとともに、避難をされている方々が一日も早く、元通りの生活に戻れることを願っております。

私は、今も三崎高校公営塾で高校生に数学と物理を教えています。もう2年になり、生徒との信頼関係もかなり良くなってきました。去年もそうでしたが、3年生の受験が終わり、合格発表が出るまではハラハラしています。今年も全員合格を祈っております。公営塾の仕事は基本的には午後1時から9時までなので、午前中は宿舎の近くに借りた畑で家庭菜園をしています。去年の夏は、驚くほどの猛暑で、蒔いた種が発芽しなかったり、発芽してある程度成長しても、異常発生した虫に喰われてしまったり、散々な年でした。中でもチンゲン菜は、きれいに発芽して成長していたので安心していたところ、ある日の朝畑に行くと、なんと虫に喰われて全滅していました。悔しかったので、中でも元気そうなひとつを鉢に移して裏庭に置いていたところ、写真のような花を咲かせてくれました。なんかホッコリしますね。生命のしなやかさと強かさを感じます。見習いたいです。せっかく花が咲いたので、このまま置いて種をとり、それを畑に蒔き収穫をしたいと思います。昨年のリベンジを被害を受けたチンゲン菜の子供たちにやってもらいます。実に楽しみです。

チンゲン菜の花と三崎祭りのクライマックス

自分にできることをやるしかない！

石口 孝治

私は一昨年の4月に伊方町三崎に来て、去年始めてお祭りに参加しました。お祭りが始まり、牛鬼を所定の場所まで担いで行くことになり、私も後ろの方で担がせてもらいました。担ぐ前は、楽に担げるだろうと楽観していましたが、いざ担いでみると、巨大な牛鬼の重さが肩に容赦なくのしかかり、痛くてすぐに離脱してしまいました。すかさず最後尾にまわり、おしりのあたりを両手で押し上げながら、せめてもの参加をさせてもらいました。反対側から二人の小学生を乗せた四つ太鼓が担がれてきて、二つが出会ったり離れたりの動作を繰り返しました。お祭りのクライマックスでは、牛鬼は写真のように完全に逆立ちにされ、そこに四つ太鼓がのしかかり、全てが整ってから牛鬼を皆で引くと、四つ太鼓が牛鬼の上に乗っかるように倒れました。同じことを二回やりましたが、結果は同じでした。今年は二回しかやりませんでしたが、例年これを三、四回はやるそうです。きっと何かの意味があり、何かのご利益があるのだと思います。私は宇和島出身ですから、牛鬼のお祭りは良く知っていますが、こんなお祭りを初めて見ました。全国でも珍しい奇祭のひとつだと思い、とても感動しました。最後に、竹で組み立てた牛鬼の解体まで経験をさせてもらいました。来年は、牛鬼の組み立てから参加させてもらいたいと思います。

私は、伊方町地域おこし協力隊として公営塾の任務をしており、任期はあと1年となります。今、任期満了後の準備として伊方町三崎地区に、小・中学生のための学習塾を開く計画を進めています。三崎地区に高校生のための学習塾はできたのに、小・中学生のための学習塾は無く、必要と考える生徒は八幡浜市まで通わなければなりません。三崎地区の小・中学生が、学校が終わってから自分で自由に通える学習塾を作りたいと思い、地元の保護者たちに聞いたりして情報を取ってきました。今、あるご家庭から中学生の家庭教師を頼まれ、伊方町教育委員会から許可をもらい、無報酬で家庭教師をしています。そうした中で、やはり学習塾は必要だと思いました。来年4月、伊方町三崎地区に小・中学生をサポートする学習塾を作ります。そのための準備に入ります。今年8月の夏休みには、プレオープンとして、学習塾の無料体験を計画しています。

残りの人生、自分にできることをやっていくだけです。それを生き甲斐と感じています。

石口　孝治　いしぐち　こうじ

1958年 津島町（現宇和島市）生まれ
宇和島東高校卒業
東京大学大学院新領域創成科学研究科修了
元原子力規制庁　上席放射線防災専門官
現在　愛媛県立三崎高校公営塾　講師（数学、物理担当）
趣味：俳句（いつき組）、料理、家庭菜園

「ピンチはチャンス！」

企業組合いわまつ 代表理事 ＜＜ HYODO HAJIME 兵頭 肇

昨年、宇和島市津島町の岩松地区が国の重要伝統的建造物群保存地区（以下：重伝建）に選定された。今まで重伝建選定にむけて先頭に立って岩松を牽引してきた岩松町おこしのキーパーソン、兵頭肇（68）さん（以下：肇さん）にお話を伺った。

岩松商店街の一角にある兵頭電機商会の跡取り息子だった肇さんは、父が高齢になったタイミングで生まれ故郷の岩松へUターンしてきた。家業を手伝いながら、大好きな野球と商工会青年部で様々な地域おこし活動に関わりながら有り余るエネルギーを発散していた。

「商工会青年部では地元の祭りや、まだ商店街のカタチを成していた岩松商店街の活性化を目指して、100個近くイベントをやってきたけど、なかなか実は結ばんかったですね」

そんな中、当面の目標を岩松の重伝建選定と決め、その過程で※1）どぶろくNASSO（なっそ）」造りが始まる。当初は、どぶろく造りと重伝建選定とを結び付けようと必死だったが、肝心の重伝建選定は一向に進まず歯がゆい思いをした。

「脇道に反れたようで反れてないような、どぶろく造りは順調に進んだ一方、肝心の重伝建は行政がらみやけん、前へ向いて進まんかったな」

代表として手伝いはするものの、どぶろく造りには全く興味がなかったという肇さんだが、ある出来事をきっかに一変する。

それまで、酒造場を借りていたメンバーが、どぶろく造りを辞めることになり、急きょ新たな酒造場を探さないといけない事になった。止めるという選択肢もあったが、止めるというメンバーは居なかった。

幸い肇さん宅の近くに良い場所が見つかったが、新たな酒造場は製造の中心メンバー宅から遠く、常に状況確認が必要などぶろく造りは、近所に住んでいる者がやらないといけないため、その役を肇さんが担うことになった。

「元来、やり始めたらとことんやる性格やけん、色々なところに勉強に行きました。元々ど素人なので、とにかく言われるままに馬鹿正直にやってきました。県の産業技術研究所の先生が言うには、酒造りはデータ8割、カン2割だそうで、今もそのスタンスは変わりません」

どぶろく特区で義務付けらている米作りにも慣れ、収量が増えてきた頃、保管していた酒米が雨漏りで濡れてしまうという事件が発生した。頭に浮かんだ選択肢は二つ。①新たにどぶろくを仕込む。②食用にする。

①は、酵母の手配と作業計画の都合で断念。②は、精米歩合が高いため不味くて食べられないので断念。かと言って、捨てるのはしのびない。

「さあどうする」、そこで思いついたのが「甘酒」。甘酒は、米と麹があれば比較的簡単に造れる。いざ造ってみると、なかなかの出来映えだった。そこで、甘酒づくりは、あくまでも肇さんの趣味の延長線上ということで、一人で味を追求することにした。

こうして商品化された※2）生甘酒は、今や企業組合いわまつの屋台骨を支えるアイテムになっている。

「酒造場の件もそうですけど、甘酒もまさにピンチから誕生しました。多分、どぶろくだけでは組合の経営は厳しかったと思います。皆、『ピンチはピンチ』とよく言うけど、やり方によってチャンスに変わる経験は何度もしてきました。それと我々のポリシーとして、『競争相手が多いところには行かない』というのがあって、どぶろくも約8割が甘口なので、日本一辛いのを造ろうと、やってきました。甘酒も精米歩合の高いNASSO用の酒米を使って加熱処理をしていないため賞味期限が短く、冷凍して販売しているので扱いにくいのですが、栄養価が高く美味しいと評価を頂いています」

「いつやめても大丈夫」とローリスク、ローリターンで運営してきた企業組合いわまつも発足して17年が経つ。今後は、身体が動く間、岩松に魅力を感じて集まってきた若者たちの後押しをしながら岩松の町並みを活用した個性的で泥臭いイベントを続けていくという。

「どぶろく造りも後継候補の若者が手伝ってくれているので、数年のうちに、その人たちに任せられれば、と思っています。経験上、イベントの運営は気力、体力ともに本当に疲れ果てるので※3）独りでやれるイベントをやりたいと思っています。今年も5月に『第2回いいもんなんよ！ウルトラ行脚』というイベントをやるんですけど、主催者は一人のマラソン馬鹿が運営してます。今回の特集に紹介されている「うなぎバカ」※4）の小山さんや「カニバカ」の田村さんのような「バカ」が町を変えると思っていますが、私は、まだまだなれませんね（笑）」

肇さんは、もう十分、「岩松のイベント馬鹿」だと思うのだが・・・。岩松には、まだまだ伸びしろがありそうだ。

インタビュー・構成／川尻純滋

※1）

※2）酵素が活きてる生甘酒（いずれもノンアルコール）は、4タイプが製造、販売されている（次項参照）

※4）ひとつの事をとことん探求したプロフェッショナルの意味　※3）声を掛けて集まってきた人が勝手にやってくれるイベント

兵頭　肇

1955 年　北宇和郡津島町岩松（現宇和島市津島町）生まれ　岩松小学校、津島中学校を経て吉田高校入学、卒業後、高松市の企業へ就職。1977 年　家業の電気店を継ぐ。
2005 年　岩松町並み保存会を」補足（代表）2007 年　企業組合いわまつを設立（代表理事）どぶろく nasso、生甘酒、発酵あんを製造販売
岩松の町並みを使った「こいこい祭り」、「nasso 祭り」、「ひな回廊」、「横っちょストーリー」、「行灯回廊」など酒蔵を利用した各種イベントを開催

NASSO 純米（どぶろく）¥1,530 税込

手間暇かけた自家栽培米を 60%まで精白し丹精込めて造りました。地元の方言で「なんで？」を意味する「なっそ」と名付けたこの酒はキリッとドライではんなりメロー。料理も引き立てるしっぽり小粋などぶろくです。

NASSO 発酵あん ¥880 税込

砂糖を一切使わず、小豆に麹を加えて発酵させてつくった発酵あん。麹の、酵素・乳酸菌・アミノ酸をそのまま摂取できる栄養たっぷりの新甘味は、麹の香りが立ち、毎日食べても飽きないやさしい味に仕上がりました。

酵素が活きてる生甘酒（ノンアルコール）¥500 税込
麹、玄米、珈琲、小豆玄米 ¥600 税込

容量／ 500ml　解凍後要冷蔵（解凍後は一週間以内にお召し上がりください）

酵素が活きてる生甘酒は、どぶろくNASSOと同じく手間ひまかけて育てた自家栽培米を使っています。シンプルな作り方で保存料などの添加物はもちろん、砂糖や人工甘味料なども一切使用しておりません。甘さ控えめで飲み飽きない美味しさです。

生甘酒 for ACTIVE
［プレーン］¥380 税込

生甘酒 for ACTIVE
［アーモンド］¥400 税込

毎日をアクティブに過ごしたい方のための生甘酒です。飲む点滴とも呼ばれる栄養価の高い甘酒には天然のアミノ酸が豊富に含まれています。「生甘酒 for ACTIVE」には保存料などの添加物が入っていないため体に必要な栄養とエネルギーのみを効率よく摂取することができます。

※詳しくはホームページをご確認下さい。

■NASSO 製造所 企業組合いわまつ　宇和島市津島町岩松 818-2　■酒類販売管理者　居村精則

https://nasso.base.shop/

第2回目　いいもんなんよ！ウルトラ行脚　2024　5/25（土）

（距離 50km 制限時間 11 時間）

本イベントは、愛媛の南（南予）をもっと知ってもらおうと南予にある 12 の企業組合からなる協議会が絶景と美食のコラボイベントを行うことで南予のファンを増やし、地域を盛り上げようと実施するのもです。

8:00 スタート（岩松河川敷特設会場）→愛南町須ノ川公園キャンプ場　25 日 19:00 閉鎖

ホームページ https://setouchi-angya.com/

まるで、東山魁夷の描く絵の世界のような中山池に忽然と佇む水没琳

萌え始めた中山池の水没林

中山池自然公園には、石の彫刻で知られる三間町出身の藤部吉人氏の森の魚等が、数点常設展示されています。公園内は四季折々、季節の花が咲き、冬にはイルミネーションが木々に飾り付けられ、町内外から多くの人が訪れます。
古来この地方は水が少なく、多くの土地は稲作ができないほど荒地で、それを嘆いた黒井地の庄屋太宰遊淵は、私財を投じて４年の歳月をかけ完成させたのが中山池です。
そして、池が完成した日、遊淵自ら人柱となって中山池の守り神になったということで、毎年、彼岸の中日に「遊淵祭」が行われ、今でも、その遺徳が偲ばれています。
この水没林は落葉樹で冬はすっかり葉が落ちてしまいます。やがて、春になると新芽が芽吹き、若葉が萌黄色になる頃、池の周りの桜の花も咲きます。

新芽と桜とが同時に観られるのは珍しく、この年、たまたま撮れた一枚

北濱　一男　写真家
1945 年生まれ　宇和島市在住　学生時代からカメラをはじめ、本格的な写真歴は約 20 数年　奈良県明日香の写真家 上山 好庸氏に師事

「撮り歩きなんよ」（ブログ）http://uwatu.blog135.fc2.com/

特集

重要伝統的建造物群保存地区に選定された

岩松の魅力

（写真提供 / 北村徹写真事務所）

宇和島市津島町岩松が内子町と卯之町に続いて3か所目の国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定された。

重要伝統的建造物群保存地区
津島町岩松の町並み

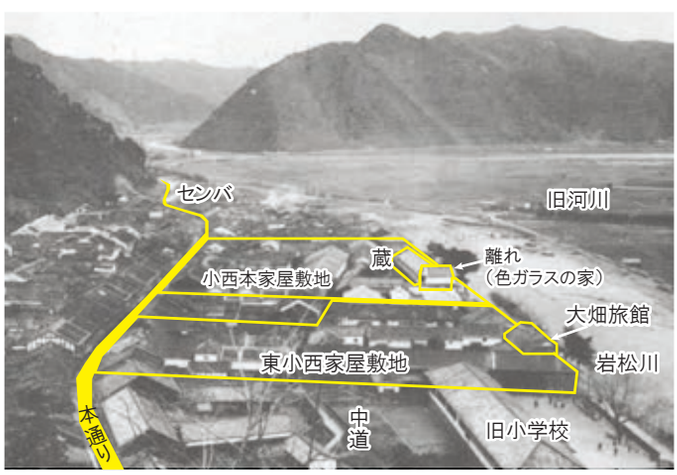
近代以前の岩松は河口に近い水田地帯の農村であり、土佐から宇和島城下へ向かう街道筋にある集落でもあった。江戸時代後期からは豪商小西家を中心とした商家の元に栄え、とくに明治以降は小西家とその分家だけでなく、西村家、西﨑家、阿部家など本通り沿いに居を構えた商家によって隆盛を見せた。

交通網の発達により、物資の集散地としての性格が薄れ、戦後には地域の中心商店街としての性格が強くなる。獅子文六は最盛期の雰囲気が残る岩松を舞台として小説「てんやわんや」を描き、昭和25（1950）年には岩松ロケで映画化されたことで、映像として往時の岩松の様子を知ることができる。

重伝建地区の範囲は北側は岩松橋から、南側は津島大橋までである。町並みの歴史的経緯から通りの性格は①土居ノ奥川沿いの道、②本通り、③中道、④岩松川沿いの道（川通り・浜通り・港町）という4つに分けられる。

①土居ノ奥川沿いの道

天ヶ森から岩松川へ流れこむ土居ノ奥川に沿って形成された道であり周囲には農家型住宅が点在する。本通り、中道が直交し、町の時代軸を横断する変化に富んだ町並みが見られ、農家などの商家とは異なる生業に伴う建築物が特徴的な通り。



写真上：岩松村誌（大正２年発行）港町
写真中：岩松村誌（大正２年発行）上本町から下本町
写真下：両小西家屋敷地付近　臨江寺北側の尾根（墓地？）から撮影されたものと推測。東小西家屋敷地に川に面して大畑旅館、小西本家屋敷地の川に面して離れと蔵が確認できる。また、本通りが港町に向かってカーブするあたりにセンバの舟入が埋め立てられる前の様子を見ることができる。右岸は水田が広がり建物はほぼ無い。慶応２年の河川付替前の旧河川の痕跡が確認できる。

岩松川の対岸（国道 56 号線側）から見た岩松の街並み

②本通り

江戸時代から現在までメインストリートとして利用され、切妻平入で比較的間口の広い町家が立ち並ぶ町並みである。格子窓、持ち送り、ベンガラ塗りなどの町家の表構えに加えて、時代の変化とともに洋風建築や看板建築などがみられるようになる。商人町の様相が色濃く見られる通り。

③中道

江戸時代の岩松の町場の端に流れていた水路「芳原溝」が暗渠となった通り。川筋付替工事に伴い西側にも町場が形成されたため、東西の高低差による整形積み石垣の連続性が特徴的な通り。

④岩松川沿いの道（川通り・浜通り・港町）

川筋付替に伴い明治以降に形成された通りであり、川通り・浜通りの土手道には、平入・寄棟などによる土蔵や旅館建築など流通往来に関連する景観を見ることができる。また、後に整備された港町も川側の通りに面して平入や妻入の比較的小規模な主屋が立ち並ぶ近代港町の面影を残す。

時代・生業など様々な要素が入り交じった町並みであることが、他には無い岩松ならではの魅力だと考える。今後、地域の人々と連携しながら活性化を進めていきたい。

にしざわ　しょうへい
西澤 昌平
宇和島市教育委員会
文化・スポーツ課　文化係

岩松の町並みは別天地

岩松川と新川岸の町並み

「それは、山々の屏風で大切そうに囲われた、陽に輝く盆地であった。一筋の河が野の中を紆り、河下に二本の橋があり、その片側に銀の鱗を列べたように、人家の屋根が連なっていた。いかにも、それは別天地であった」

小説『てんやわんや』

これは、主人公犬丸順吉がバスの車窓を透かして、峠から眺望した相生町の印象を描いた一節である。まさに岩松の町並みの景観を言い得て妙の表現だ。

昭和20（1945）年12月、妻の富永シヅの故郷岩松に戦後疎開した獅子文六一家と滞在先の東小西家の闊達な当主や屈託のない地域住民との2年間の交流が小説を創る素地となっている。

岩松の起源は、土居の奥

南北朝時代の※1）1340年、越智俊氏が津島郷の初代領主に就いた頃、郷内は平穏であった。海抜334㍍の天ヶ森を背に山裾（海抜17㍍）の川縁に草屋根の家が数軒あった。住民は母屋の周囲に広庭を有し、営農や養蚕で暮らしを立てていた。更に岩松川流域の水田を広く所有していた。しかし、戦国時代の天文15（1546）年、領主通孝が天ヶ森城を居城にしたので、その山麓に砦を守る土居（土塁）が造られた。ここに土居の奥や土居の奥川の名称が定まった。城の守備は堅固であったが、10代通繁が天正8年、長宗我部の侵攻で討死した。同13（1585）年には、最後の主・通顕が秀吉の四国征伐で倒れ、越智一族は滅亡する。その後、岩松住民は土居の奥の高台に石の祠と石垣の囲いを造って一族をここに祀ったが、明治45年、三島神社に合祀された。今も遺る高台と石垣の囲いは、往時の事跡を物語っている。

※1）北朝の暦応（りゃくおう）3年、南朝の興国元年

農村から町場へ

米屋惣兵衛45歳（父は近江の湖西から宇和島城下町に移住した御用商人であったとされる）は、貞享元（1684）年、藩から岩松に酒造業を営む許可を得た後、土居の奥の住人から低地にある田畑を購入して酒造業を創設した。まだガラスの容器のない時世だったので、大樽や酒樽を造る杉材を大量に必要とした。樽職人や杜氏・蔵人の作業場や住居、資材貯蔵庫や酒蔵等の建設も急務であった。更に職人の確保や廻船・船場を整えて酒造りを開始した。ここから岩松村は農村から川港を拠り所とする町場へと変化していく。

江戸時代の中期には生産年齢人口が増加の一途をたどり町場も賑わってきた。2代久右衛門は、元禄12（1699）年、近家に藩営による塩田を開発した。小西家による経営は、塩の専売制が施行される明治38（1905）年まで206年間続いた。

明和6（1769）年、3代久八の4男萬兵衛が分家して本家の北隣に東小西家を興した。折しも、津島組の産物が増加して岩松が

松田 厚子
宇和島市文化財保護審議会委員

その交易の場として活気付いた頃である。東小西家は本家小西家と連係を保って、小廻船業、醤油製造業、木蝋製造、製炭仲買、金融業を営んだ。

本家は久八が酒造業、製塩業を営む傍ら、岩松大火に米80俵、宇和島藩「関東川筋御普請」に米1500俵を献上した。藩に湖西なる苗字帯刀を許されるが、願い出て小西と名乗ることになった。この頃、津島組質商の許可が下りる。

後期になると藩命によって、4代安太郎が保田橋の架け替えを行い、5代惣三郎は文化元（1804）年、製蝋業を創始し、蝋座頭取役を務めた。一方、寛政10（1798）年、4代から始まった新田開発は、8代荘三郎の文久年間まで続いた。その結果、両小西家は大地主となり、荘三郎は幕末津島組を牽引することになった。

町並み発展の前後

慶応2（1866）年の直川工事竣工以前の岩松川は、現在の町並みから遥か西側の田畑の中を北から南へ蛇行して流れていた。嘉永6（1853）年、岩松川蛇行地帯で洪水が発生し、高田村の堤防が切れ、岩松の町並み近くの田畑も流失した。6代荘三郎は藩主宗城公の藩命により改修を行った。しかし、その後も水害は続き、川や土手の改修は洪水とのいたちごっことなり川底の土砂の堆積で水深が浅くなってきた。そこで、8代荘三郎は水害対策工事を藩の役人、村役人と協議して、9代藩主宗徳公の追認を得て川筋を東側の町並みに寄せる直川工事を行った。費用は小西家と吉良家、船田家などの庄屋が負担し、加えて8代荘三郎が米2000俵を投じて慶応2年に竣工した。

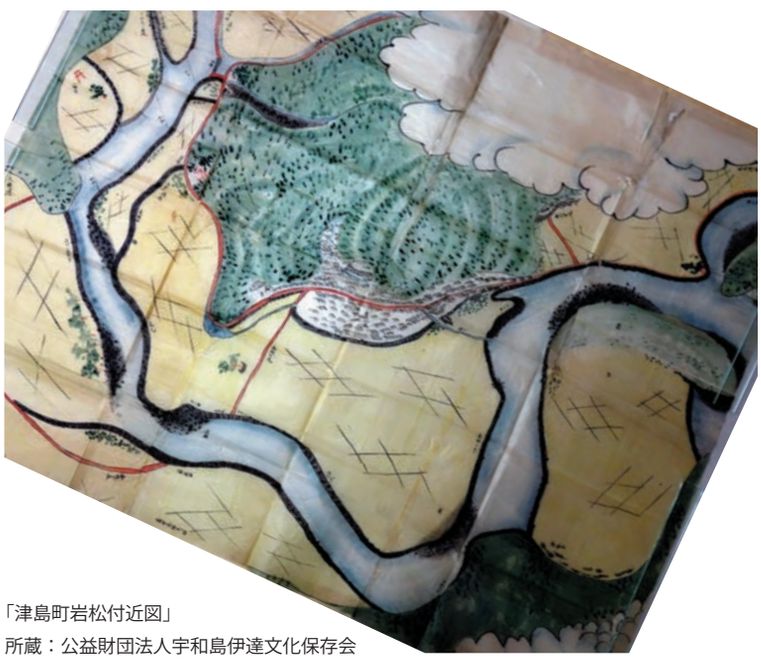
だが、川の浅瀬化は収まらず、東小西家と※2）笹屋は船場から河口に至る水田地帯（本通りの南端）を造成し、ここに倉庫を造って移動した。それゆえ、明治9年、港町が成立し、廻船業は昭和初期まで続いた。小西両家も川の前に屋敷を広げ、明治20年頃完成する。こうした町並みの拡大は川港を利用した商業の更なる発展へとつながった。

町並みの核は醸造業

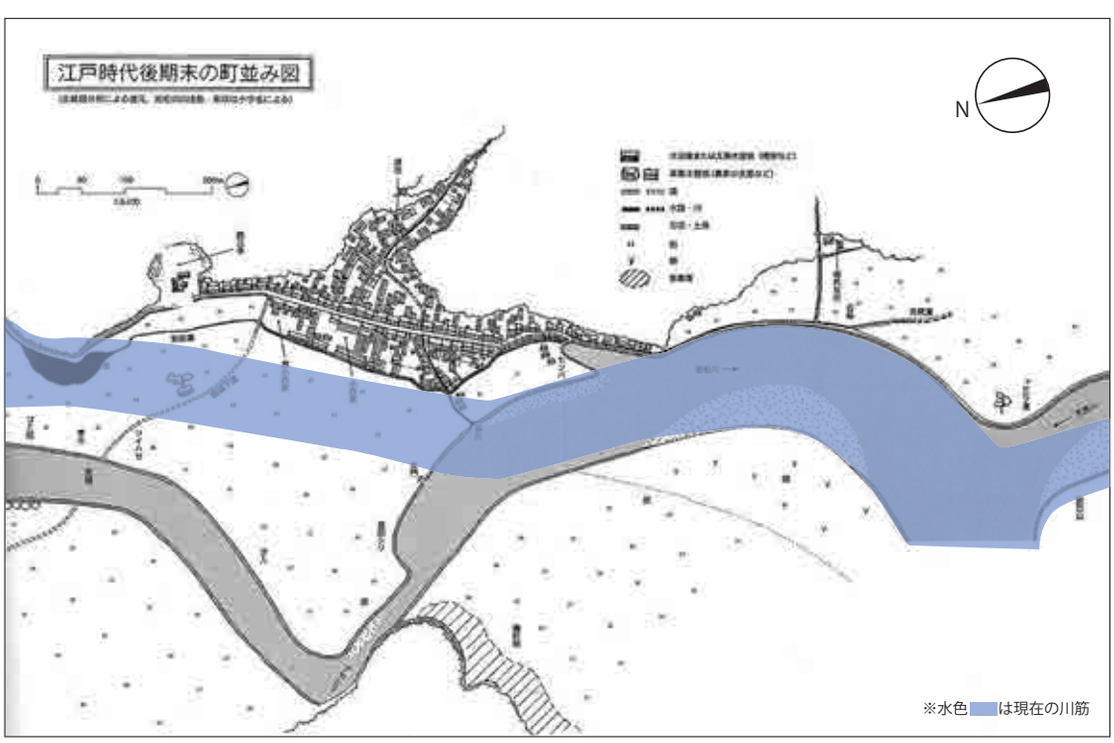
江戸初期、岩松に酒や醤油の醸造加工をもたらしたのは、小西家であった。それから85年後に東小西家と称する分家ができる。更に明治27年に西村酒造、同40年頃、阿部酒造が開業した。醤油業は東小西の他、西崎、内山、土居が創業する。明治42年の4軒の酒生産高は1400石、醤油5軒の生産高は1600石を記録。岩松の町並みに今も残る醸造業の営みは伝統の維持と発展を未来へ伝えている。

岩松川は恵みと水害をもたらしたが、住人は川の保護と開発の調和を図りながら生きてきた。そのことに思いを致しながら、別天地と称される岩松の町並みを維持し、発展させていく方途を探していきたいものである。

※2）小西家につぐ豪商で林業、廻船業を営んでいた。



「津島町岩松付近図」
所蔵：公益財団法人宇和島伊達文化保存会
※下図にあわせるため回転



岩松「愛媛県宇和島市津島町伝統的建造物群保存対策調査」より

獅子文六

「てんやわんや」で津島を書く

宇和島市文化財保護審議会委員　松田厚子

獅子文六、本名：岩田豊雄は戦中から戦後の日本人の心をとらえた小説家であり、演出家である。明治26（1893）年、貿易商岩田茂穂の長男として横浜に生まれ、東京で育った。大正2（1913）年、小説『韻』の執筆中に慶応義塾大文科を退学し、文筆生活を送る。

大正11年、29歳、演劇研究のためにフランスに渡る。ロシア・バレーやモスクワ芸術座の舞台芸術に魅了され、劇評を書く。同13年、ベルギー、ドイツ、オーストリアで演劇の鑑賞眼を高める。14年、妻マリーを伴いフランスから帰国。昭和7年、マリー病死。長女巴絵6歳。同9年、岩松町（現：宇和島市）出身の富永シヅと結婚。

昭和元（1926）年から9年にかけて、戯曲『貧者』『クノック』や『舞台装置』の翻訳・開設を行う一方、ルナールの『にんじん』等の演出を担当した。同12年、岸田國士や久保田万太郎らと文学座を起こす。

同年、小説『悦ちゃん』が映画化された。同17年、朝日新聞に本名で連載した『海軍』は翌年、海軍報道部で映画化、公開される。

敗戦直後の昭和20年12月、一家三人で妻シヅの故郷岩松町に帰郷した。『海軍』が公職追放の対象として危惧される中、妻の実家や滞在先の素封家・東小西家の温かいもてなしを受け、ここは「別天地」であった。「年中行事、方言、民謡、口碑、珍しい話しなどをノートに…」と『娘と私』に書き著している。

こうした周到な取材を生かして、津島を舞台にした私小説『娘と私』、ユーモア小説の『てんやわんや』『大番』の他、『桐の木の怪』『遅日』『無類の英雄』『塩百姓』など滑稽にして哀感漂う軽妙な作品が生み出された。『娘と私』は、NHK朝の連続テレビ小説の第一作となり、視聴率を高めた。

昭和22（1947）年10月、一家は東京に戻る。翌年、追放の仮指定を受けるが、5月に解除された。同25年2月、『てんやわんや』の映画を見ることなく、妻シヅは脳血栓で死去。大磯町に転居する二ヶ月前のことであった。

44年、文化勲章受賞。同12月13日、死去。享年77歳。

獅子文六（妻シヅのアルバムより）　写真提供／近藤正子

娘と私／獅子文六
筑摩書房
1,540 円 (税込)

てんやわんや／獅子文六
筑摩書房
858 円 (税込)

岩松川橋畔にある自筆句碑「思ひきや伊予の涯にて初硯」

「アカテガニ」がいる街

アカテガニとの出会い

嫁いで20年、岩松地区では夏になると家の周辺だけでなく、家の中にまでカニがたくさん現れます。岩松で育った夫や子どもたちには見慣れた光景のようですが、私にとっては事件でした。しょっちゅう、スライドドアで潰してしまいます。園芸用のバケツや花瓶の中から出られなくなり干からびていたり、2階の部屋に侵入したり、道路で車に轢かれてペチャンコになったのもいます。

私の実家近くの川には、サワガニがいましたが、ここ岩松のカニは少し違います。背中（甲羅）に**ニコちゃんマーク**があるのです。しかも、赤色と黒色、二種類のカニが存在します。地元の人に聞くと、昔から赤を「アカベンケイ」黒を「クロベンケイ」と呼び、捕まえたカニをタコ釣りの人に売って、小遣い稼ぎをしていたそうです。

こうして、手がかりを掴んだ私は「#津島町　ベンケイガニ」でネット検索してみました。すると、「ベンケイガニ」は、愛媛県レッドデータブックに「絶滅危惧Ⅰ類／分布地は県内／宇和島市、津島町」とありました！　そんな絶滅寸前の貴重なカニとも知らず、私は「また死んどらい・・・」と軽々しく扱ってきたことを反省しました。

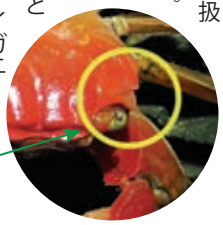
ベンケイガニ　日中は巣穴や物陰を好み夜になると活発に動く

（南予生物フィールドノート）

岩松川のカニたち

こうして、カニに興味津々となり更に調べていくと、ベンケイガニによく似た※1）「アカテガニ」というのがいることが分かりました。しかし、この両者、素人では違いが全く分かりません。

では、岩松周辺にいるカニは、どうでしょうか。改めて観察してみると、アカテガニばかりではありませんか！　それから高三の息子を護衛に付け、夜行性のカニの観察を毎晩のように行いました。その結果、個体数は少ないものの、ベンケイガニを確認、クロベンケイガニは多数、ハマガニ、アシハラガニも、そこそこ生息していることが分かりました。



※1）目の下、甲羅側面に1～2㎜の切れ込み（黄い丸）があるのが【ベンケイガニ】、ないのが【アカテガニ】

豊かな自然と岩松の地形

アカテガニは、海から離れた川沿いの土手や林の中に生息し、陸上の生活に適応したカニです。しかし、7月～9月にかけての大潮前後の数日、陸で産卵したメスは、お腹にふ化寸前の卵を抱えて河口や海に移動します。その後、水中で体を上下に震わせ、卵をふ化させ、子どもたちを海へ放つ（放仔（ほうし）行動）習性を持っています。

この度、重伝建地区となった岩松は、山と岩松川に挟まれて集落があります。そのため、山で生活しているアカテガニのメスは、お腹に卵を抱え、危険を冒し、家屋に迷い込まないよう、車に轢かれないようにして海へ向かわなければならないのです。

大潮の日、港町地区には無数のカニたちが集まり放仔を行います。もともとこの場所は、アシなどが生える緩やかな水際で、餌も豊富にあり、カニたちにとって都合のいい環境が整っています。

岩松川河川敷の様子

これから

アカテガニは、近年、急劇に数を減らしていると言われていますが、岩松川には、天然ウナギやシロウオ、テナガエビなど多種多様な生き物たちが生息しています。

今後は、ここで暮らす人だけでなく、小さな生き物たちにとっても、石垣や集落をめぐる水路など、河川と一体となった文化的景観の保全が進むことを願っています。

少しずつですが岩松のカニに興味を持ってくれる仲間が増えました。夏季には「放仔観察会」を行いたいと思っています。

ハマガニ　紫色をおびていてハサミが大きくかっこいい。河口域の湿地に穴を掘って生息

たむら　ゆうこ
田村 裕子
フラワーショップたむら

全国有数の※3）生息数を誇る

岩松川のうなぎ

3月8日に岩松川で行われたモニタリング調査

藩政時代の岩松は、小西家により新田、塩田、森林の開発や河川の改修が行われ、岩松川では、鮎、しらうお、鰻漁などが盛んに行われ宇和島藩の貴重な収入源のひとつになっていた。

大正から昭和初期に付け替えられた岩松川では、護岸に沈床が敷かれ川の生物にとって最高の棲家となり、しらうお漁や青のり漁と並んで鰻の※1）「石ぐろ漁」も盛んに行われた。昭和10（1935）年には河口で2㍍の※2）「大うなぎ」が発見され、昭和43（1968）年に愛媛県の天然記念物に指定されている。

そんな岩松川も昭和50（1975）年頃になると上流の山財でダム工事が始まり、河川や橋の架け替え、堰堤（えんてい）の造成などの影響により、岩松川流域での漁業は、できなくなるのではないかと危惧されていたが、天然記念物の「大うなぎ」が生息していることもあり、可能な限り自然に近い環境を残すよう工夫された結果、今では、鰻、鮎、カニ、しらうおの遡上も徐々増えてきている。

小山欽也さん（82歳）が、岩松川で初めて「石ぐろ」を作った中学生の頃は、夕方、川漁師が鮎獲りの投網をしている最中でも鰻が水面から顔を出すほどたくさんいたという。当時、「長（なが）さん」という鰻釣りの名人がいて、小山さんに、こんなことを話してくれたと言う。

※1）干潮時に川底を掘って網を敷き、その上に小石を積み上げる漁法。そこに川エビや小魚、カニなどが入り、それを捕食するためウナギが石の穴の中に入るので、それを捕獲する

「鰻は、昔も今も顔も姿も変わらへん、ワシは鰻と話しができるんよ（笑）。鰻は獲っても三日もしたら別の鰻が入るけん、鰻の穴（棲処）を10個持っとったら飯が食える。そうして稼いだ金で毎年別府に湯治にいくのが楽しみでな、ほんに、鰻は神様よ、ここ（岩松川）は、ワシの穴場よ」と・・・

そうして、見よう見まねで鰻漁を続けていたが、二十歳頃からは、「石ぐろ漁」一筋約60年、岩松川で鰻を獲り続けている。

そして、平成13（2001）年、小山さんは岩松川漁業協同組合（以下：岩松漁協）の組合長に就任（小山さんの鰻漁は趣味で、売ったことは一度も無いと言う）して、国が進める放流事業にも関わるようになった。（小山さんが組合長になる以前は、鰻を放流しても増えるどころか、逆に減っていたという）そんな中、自身が仕掛ける「石ぐろ」に放流した鰻が一向に入っていないのに気が付いた。そして、ある日、周辺に鰻を放流して10日放置した「石ぐろ」を開けてみると、天然鰻が放流鰻を頭から飲み込んでいるのを見て驚いた。

「これは何かあるぞ」と思い、場所の異なる天然鰻を箱の中で1年程度飼い、その中に海で捕獲した鰻を入れ、二日後に開けてみると、海で捕獲した鰻は首の辺りを食いちぎられていた。

このことから、鰻は縄張り意識が強く、放流された「よそ者鰻」を排除しているの

岩松川漁業協同組合
組合長
小山（こやま） 欽也（きんや）

※2）2019年10月30日、岩松川で、体長1.1メートル、重さ6.8キログラム、胴回り40センチメートルの大うなぎが発見されている

ではないかと思った。では、放流した鰻は何処へ行ったのだろうか？　調べてみると、鰻が汽水域で獲れる時期と放流期とが重なることが分かってきた。

放流された鰻は、環境の変化や縄張り争などの影響で棲家を失い、汽水域へ下り、そこで捕獲されるのだ。岩松川の鰻の放流数は、稚魚価格の高騰で減少していて、それに比例して汽水域での鰻の漁獲量も減少しているが、「石ぐろ漁」による漁獲量は、むしろ増えているという。

「放流は、鰻のおらん川ならエエけど、おる川に放流したら、生態系を狂わすし、エエことないんよ」

小山さんは、愛媛県の内水面漁場管理委員も歴任し、約60年間にも及ぶ鰻漁の経験と強い探求心で今では、全国規模の学術会議の場でも一目置かれるようになった。

「千人ほどが出席する東京の学会に行くと、日本の鰻研究の第一人者で九州大学大学院農学研究院の望岡典隆特任教授が『60年以上も鰻と関わってきた人だから、この人の言う事を聞きなさい』と皆の前で言うてくれるもんやけん、私も『川も身体もコンマイ（小さい）けんど、ここに来たら大男になれるのが嬉しゅうていけんです』、と応えるんだすらい」

平成28（２０１６）年7月、全国内水面漁業協同組合連合会が進める鰻生息環境改善支援事業が岩松川で始まった（岩松川河口に設置した10基の「石倉かご」を5年にわたりモニタリング）。

これを受けて一部の人達からは、「子どもたちを川に入れて調査を兼ねたイベントをしてはどうか」、という意見があるようだが、小山さんは、川の環境保護はイベント感覚ではできない。と言い切る。

また、研究者の間で「冬は鰻は獲れない」というのが定説（川の鰻は冬は海に下る）だが、岩松川では昔から冬に鰻を獲っていた。そして、これを立証するために岩松川で2月に「石ぐろ」開けたところ、中に鰻が居たため、学者たちが驚いたという。

全国各地のモニタリング調査対象の河川の中で岩松川が全国屈指の個体数（鰻）を誇っているという。

小山さんに、どうして岩松川（鰻漁）に惹かれるのか聞くと――――

「子どもの頃は、岩松川での遊びで友だちが出来、川を通じて大人の話しも聞け、その大人たちから岩松の歴史や文化を教えてもろうたんです。いわば川に育ててもろうたということですらい。そやけん、岩松川を次の世代に引継ぐことが使命やと思うとります。川は、自然のままが一番大切で、そうすれば、鰻や鮎やカニなどが沢山おる豊かな川が守れるんです。その為には、それなりに手を掛けてやらんといけんので、早よう後継者を作らんといけんと思うとります」と話してくれた。

小山さんの漁（川）が好きになる三原則。

「古きに聞け、川に聞け、魚に聞け」

（写真上）３月のモニタリング調査の時に獲れた大きな鰻
（写真中）鰻を捕獲する際は、石ぐろを網で囲い鰻が逃げないようにする
（写真下）鰻を取る時は、こうして石ぐろを覗き込む
（図１）石ぐろに鰻が入る様子（小山さん作）

（図１）

〈岩松川の天然うなぎが食べられる店〉

料 理　田むら

宇和島市津島町高田甲 280－2　☎ 0895-32-2023
■定休日／不定休　■営業時間 11:00 ～ 14:00　※夜は予約のみ

岩松川天然うな重
5,000 円（税込）

「町並み保存」で岩松は何を目指すのか・・・。

この度、岩松地区が国の「重要伝統的建造物群保存地区（以下：重伝建）」に選定されました。２００３年、町の振興施策の柱として旧津島町が「岩松の古い町並みを活用したまちづくり」を掲げ、２００４年に建造物調査を開始しました。翌年から文化庁の補助を受け、報告書が完成したのが２００７年です。それから、「岩松町並み保存会」が中心となり、行燈（あんどん）を置いてまちを巡る「岩松行燈回廊」、岩松川での「さよなら夏休み」、お雛様と古民家を楽しんでもらう「岩松ひな回廊」等、〝まち〟を使って岩松を知ってもらうイベントを続けてきました。どぶろく「NASSO」もその中から生まれました。

岩松川沿いの松

市町村合併を経験し、紆余曲折もありましたが、宇和島市が岩松の町並みを伝建制度を使って活性化を目指すことを重要施策の一つに掲げた２０１８年、「岩松町並み保存会」を発展的解消し「岩松守ろう会」が立ち上がりました。そして、「保存対策調査報告書」が完成して16年の時を経て、２０２３年国へ重伝建選定の申出し、晴れて重伝建地区に選定されました。なんとか、国のお墨付きをいただいて建造物等を残し、活用していく体制ができたことに喜びを感じ、安堵しているところです。

重伝建は、国の文化財の種類の一つですが、他の多くの文化財は**指定**ということに対し、重伝建は**選定**といいます。指定の文化財は国が名指しすることで文化財になります。

一方、重伝建地区は、自治体自らがまず保存することを決め、その保存地区について「この地区はこんなに貴重で価値が高いと考えますが、国の宝物（文化財）として認めてもらえないでしょうか」といった申出を行い、国（文化庁）の調査・審議を経て、選ばれるという経過をたどります。

すなわち、自治体が住民の自分たちの地区にある伝統的な建造物等を守り続けるという意思を確認し、自治体で「伝統的建造物群保存地区」として決めることでしか国に選定を受けることはありません。そのために市は特定物件と呼ばれる、残すべき建造物の持ち主に「同意書」という形で意思確認をしています。ここが、重伝建と他の文化財との大きく違うところで、自らの意思で保存地区になり、それを様々な制度で後押しされながら自らが「歴史的景観を大切にしたまちづくり」を続けていくという宣言です。ですから、これからも国や市がまちづくりをしてくれるのではなく自分たちで景観を守り残しながら、活用し継承していく「町並み保存地区」とは、そういう地区だと思いますし、その過程自体を「町並み保存」という言葉であらわされるのではないでしょうか。

重伝建選定以来、少しずつ岩松を訪ねる方が増え、住民の皆さんの戸惑いも出ています。何を見せたらいいのか、どこを訪ねればよいのか、どこを案内したらよいのか自問しています。あれも欲しい、これも欲しいといった気持になります。一朝一夕に施設がそろい、お店ができるとは思っていませんが、訪れた皆さんは「重伝建地区」には、そのような施設が揃っていると思われて訪問されることもあり、少なからずジレンマを抱えている人たちも出てきました。

かつて商店街と呼ばれた岩松も多分に漏れず、高齢化、人口減少が顕著に見え、商店街の面影は残ってもその姿はありません。もしかしたら、今の住民だけではお客様を迎える力は足りなくなっているかもしれません。しかし、現在は幸いにも大都会の便利さよりも田舎の快適さを好む若者もいます。地方に目を向ける人たちがいます。建築家や様々な専門家も含めた伝統的な町並みに興味を持っている人たちと交流・関係をもち、あわよくば毎年一人ずつでも移住者を招き入れることができる試みをしていきたい、していかなければならないと感じています。そしてその人たちと一緒にかつての様なコミュニティ、かつての様な賑わいを取り戻していく。こんな姿を、いま岩松にかかわる皆さんで作っていきたい、そう感じています。

もりた　こうじ
森田 浩二
NPO 法人　岩松守ろう会
事務局

おしらせ

井関喜代　烏瓜（水彩）

森本秀樹　雨を待つ（水彩）

井関喜代／森本秀樹
水彩新作展

2024.6/6（木）～6/12（水）

＊6/10（月）は休廊

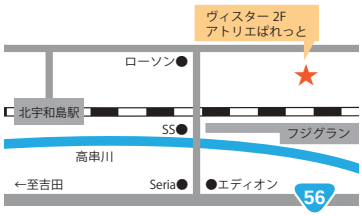
10:00～17:00（最終日 15:00 まで）

会場 / ギャラリーアトリエぱれっと

併設　井関喜代　自選展

幼い頃から身近に12色のサクラマット水彩絵の具があり、振り返ると一番長く親しんできたのが水彩なのかも知れません。時代と共に絵具も進化して表現も多様化して参りましたが、やはり昔からの水彩絵の具は素朴で奥が深く優しさを感じるように思えます。この度、新作による水彩二人展を開催することになりました。お忙しいとは存じますが、皆様にご高覧戴ければ幸いです。

〈売上の一部は能登半島地震災害義援金に寄附します〉



アトリエぱれっと　宇和島市伊吹町1083-1-2F　☎ 090-7784-4703

HP）https://www.art-palette.com/

会場／パフィオうわじまホール

2024年
4月14日（日）

開　場／14:30　開　演／15:00

入場料／一般 1,500 円　高校以下 1,000 円

※当日券は 500 円増し

※未就学児は入場できません

QRコードから
ご予約できます

お問合せ／0895-49-5922

主　　催／宇和島市生涯学習センター

後　　援／宇和島ケーブルテレビ株式会社

読者プレゼント　抽選でペア招待券を３組様に

《応募方法》ハガキ、メールで住所、氏名、連絡先、年齢、性別、本誌へのご意見ご感想をご記入の上、下記までお送り下さい。

《応 募 先》〒798-0041　宇和島市本町追手2-8-21
宇和島信用金庫　業務推進部　広報文化室まで
メール：uwashin-gyousui@uwajima.shinkin.jp

《締切り》４月５日

食堂 こみつ

昭和の香りと響き

撮影／竹田　諭

こみつファン　竹田　諭

※1）朝ぼらけに古い引き戸を開け、内側に仕舞われた暖簾を右手でくぐると、たちまち、その匂いに包まれる。

そのなんとも懐かしい匂いは、子どもの頃の記憶を思い出させながら挨拶を交わす。「おはようございます。開いてないかと心配しましたよ」「久し振りやね、こんなにたくさん雪が積るの…」奥にある半間程の小さな調理場から2代目店主の弘子さんの声とまな板を叩く「トントントン」という音が小気味よく聞こえてくる。

愛媛県は、東予、中予、南予と、それぞれ気候風土、人柄も違っている。城下町宇和島は、JRの終着駅を降りるとポッカリと浮かぶ鶴島城（宇和島城の異名）がある。その城の南側、本町追手筋に食堂「こみつ」はある。

昭和20年頃、開業したというこの店は、先代の奥さん光子さんの名を逆さに読んだ「こみつ」が、店名の由来。現在の暖簾は常連客の手作り、看板代わりのショウケースに置かれたお品書きも、別の常連客の手作りだ。

「こみつ」に通い始めて半年以上が過ぎた朝、南国宇和島に雪が積り、店先の井戸には薄い氷も張っていた。私がいつものように暖簾を表に出して戻ると、「ありがとう、手が届かんけん悪いね」（私）「この匂いええね、子どもの頃の運動会の朝を思い出すな」（弘子さん）「なんで?」と会話が弾む。

ショウケースに並ぶのは、右から、おはぎ三種（あんこ、きなこ、青のり）・いなり寿司・ちらし寿司・田舎巻き。あんこは、北海道

※1）朝の空がほのかに明るくなった時、夜明け方を意味し、「あけぼの」より少し明るくなったころを指す

昭和 48（1973）年撮影の「こみつ」 タナベ昭和館より

現在の店の外観

ショーケースには、「おはぎ」や「いなり寿司」など定番商品が並ぶ

お気に入りの広島土産の大しゃもじで仕込みをする弘子さん

産小豆3キロを大鍋で3時間、大きな木製しゃもじで混ぜながらグツグツグツと炊くと、なんとも甘い香りが漂ってくる。ガスの点火は、懐かしい桃マークのマッチ。「パチッ」と擦ると火薬が香る。

ここの料理は、全てが手作り。そう、手作りなのだ。運動会の朝、今は亡き母が作ってくれた巻き寿司の酢の匂いと頬張った時の食感が思い浮かぶ。あの頃、決して豊かではなかった暮らしの中で、年に何回かの贅沢で満たされた朝の記憶が、この店で蘇る。

きっと、昭和生れの誰もが記憶していて、五感を刺激する「あれ」がこの店にはある。そして、頬張る直前、手の指に残る感触、酢の香り、そして、あのやさしい味覚は、インターネットの世界にはない。「舌鼓を打つ」という言葉があるが、それは、どんな音だろう。つい童心にかえって鳴らしてみたくなる。

残念かな、今秋で暖簾をたたむという「こみつ」。感謝は尽ないが、長い間、本当にご苦労様でした。ありがとうございました。

そして、さようなら・・・

撮影／竹田　諭

文ちゃんとどつぼの

予土線のあの人に会いたい7

茶農家・俳人

川嶋健佑（かわしま けんすけ）さん

最寄駅は「真土駅」

文／山下文子
写真／坪内政美

「ちょうど午後4時半くらいに、汽車が駅に止まるんですよ。その音が聞こえたら、あと30分だけ作業しようと思うんです」と話すのは川嶋健佑さん（31）。

真土駅の山側に茶畑が見える。駅に近い踏切のそばには「松野町　茶発祥の地」の碑。川嶋さんは、ここで茶を栽培している。

「やぶきたという日本茶の品種で、今は5月に収穫する新芽のために、刈りそろえをしています」

地域の茶農家を師と仰ぎ、その知恵と経験を懸命に学ぶ。管理する4反ほどの農園からは緑茶にとどまらず新たに紅茶も生み出した。無農薬、有機栽培に加え、風通しに気を付け、木の根元には山から集めてきた落ち葉を敷く、こうすることで、まろやかで甘みのある茶葉ができあがるという。

軽々と野を歩き、地域に新風を吹き込むこの男、一体何者なのか・・・。

紫陽花が咲き誇る真土駅

大阪市出身の川嶋さんが松野町に移住してきたのは２０１８年。

「最初来たときは（2月）、大雪だったんですよ。水道管は破裂するし、南国愛媛のイメージとは、程遠いというか、もう衝撃でした」

川嶋さんの実家は森林に覆われた松野町とは大違いで新幹線駅の高架傍だという。

「ちょうど新幹線が加速するあたりに家があるので、新幹線が通過すると『ゴッ』って音がして、家も揺れて、いつも震度1くらい揺れていると思います」と笑う。

予土線の〝新幹線〟こと「鉄道ホビートレイン」の通過とは桁違いだろう。そんな都会育ちの川嶋さんだが、松野町では農家でありながら、俳人でもある。

そもそもの移住のきっかけは、松野町の地域おこし協力隊で、関わったのが芝不器男記念館だった。芝不器男は、昭和初期の俳壇に天賦の才をもって数々の句を残した俳人である。川嶋さん自身も大学時代に俳句に親しみ、不器男のことを知っていたという。

不器男の句をガッツリ学んだのは松野町に来てから、というものの、記念館のプロデューサーとしても活動していて、地元の小学生たちに俳句の授業も行っている。

川嶋さんに不器男の句を一句を紹介してもらった。

汽車見えてやがて失せたる田打かな

「大正12年の『天の川』に掲載された作品です。ちょうど鉄道が吉野（現在の吉野生駅）まで延伸したときで、彼の日記には『僕のすきだつた道ゲ谷も鉄道敷設のため、まるで変わってしまった』と記述があり、鉄道工事で変わっていくようすが記されています」と解説してくれた。また、句について「汽車が遠くから現れて近づき、そして遠くへ消えていく。※田打をしている穏やかな田園風景を汽車の音が掻き消し、そしてまた穏やかな田園風景に帰っていく。時間の経過を感じられる句です」と付け加えてくれた。

※田んぼを耕すこと

不器男は、鉄路によって変わりゆく故郷の情景を並々ならぬ思いを持って見ていて、変わっていくことは悪いことではないが、見慣れた景色を惜しむ気持ちがよくわかる。

不器男が見ていた鉄道は、県境を越え延伸し、やがて予土線と名を変え、今年、全線開通から50年を迎える。そんな予土線について川嶋さんに聞いてみた。

「松野町に来た当時は、僕も『勝手に予土線推進協議会』とか言って、仲間たちとよく使ってました。ちょうど18時くらいに真土駅から乗って江川崎で食事をして20時くらいの汽車で帰るみたいな」

沿線の人口減少は止まらず、鉄道利用は、ますます右肩下がりになるだろう。路線の赤字をどう補填していくのか、それは沿線の住民だけでは、どうにもならないことなのではないか。

「人を運ぶには、もうすでに限界があると思うんです。松野町には梅とかゆずといった特産品がいっぱいあるので、物流に活用するのもいいんじゃないかと。鉄道が四国を循環しているというのも魅力的ですよね。人が減るから乗る人も減るけど、たとえばゆずを積んで香川県まで運んだりとか貨物輸送で活発になるとか、どうでしょうね」と提案する。

穏やかな人柄の中にも、ときおり熱い情熱のようなものを感じる川嶋さん。毎年、新商品を出したいと前向きだ。

「今、サンルージュっていう品種のお茶も栽培しています。赤い葉っぱが特徴なんですけど、紅茶にしてレモンを入れると紫色に変わる、おもしろい品種です」

と、さらなる挑戦に、まるで子どものようにはしゃいでいた。茶畑に吹き込む春の風は、まだひんやりとしていたけれど、空は青く晴れやかだ。遠くに汽笛を聴きながら、鉄路のそばの茶畑からまた何か生まれるのではなかろうかと私もワクワクしている。

サンルージュの茶葉について説明する川嶋さん（右）と山下さん（左）

山下 文子（やました　あやこ）

宇和島市出身、鬼北町育ち。
予土線沿線は県をまたぐも「ザ・生活圏」。鉄道を始め、乗り物は何でも大好き。座右の銘は「その角を曲がれば、旅」（※永六輔氏のうけうり）。
「四万十の鉄道 予土線」のホームページでコラムを担当。

坪内 政美（つぼうち　まさみ）

スーツ姿で撮影するという奇妙なこだわりをもつ鉄道カメラマン・ロケコーディネータ。各種鉄道雑誌などを執筆する傍ら、テレビ・ラジオにも多数出演。町おこし列車「どつぼ列車」を主宰し、駅スタンプを製作・寄贈する活動を行っている。
高知県予土線利用促進対策協議会アドバイザー。

四万十川の
鉄道よどせん

協力：高知県予土線利用促進対策協議会

いのちのはなし

グーチョキパー7

「いっぽ、いっぽ、またいっぽ パートII」

文 / 毛利弘子

私の初めての「四国八十八ヶ所巡礼」は、あろう事か「歩き遍路」だった。前号にも書いたように、「楽しそう！」とハイキング気分で始めたのだ。当然の事ながらお遍路のお寺参りの作法すら知らず、ましてや「般若心経」も全く唱える事も出来ず、経本のどこを唱えているのか目が泳いでいたことを思い出す。

参加者の皆さんは、何度となく霊場巡礼されているベテランばかりで、全くの初心者の私は、見よう見まねで、モタモタ、バタバタしていた。「あれ！　毛利さんは初めてなんかな？」、「こうするんで、そうしたらいけんので」等々、そして、その内、私自身も分からない事が分かりだし、「それは何ですか？　これはどんな意味ですか？」と、※先達さんにも質問が出来始めた。

霊場巡りには、たくさんの作法があり、その一つ一つには大切な意味がある。例えば、山門で脱帽合掌し一礼するのは、山門までお迎えに来てくださり、帰るときは見送ってくださる仏様へのお礼。鐘を衝くのは、お参りに訪れた挨拶・声掛け。そして、出鐘、戻り鐘は縁起が悪いとされ、古来より「出る金」とも言われる（訪問先を出る際にチャイムを鳴らさないのと同じ事である）。

また、各霊場では、本堂と大師堂でお参りをし、お線香を3本・ろうそく1本と、それぞれ奇数にしてお供えするが、それにも意味があり、3本の線香は、「身口意（しんくい）（心・身体・ことば）」、ろうそくは、「心の灯す智恵をお供えしますので願い事をお聞き下さい」という意味がある。

※四国八十八か所参りを４回以上周り、（一社）四国八十八ヶ所霊場会より公認を受けた布教者（お遍路さんの案内人）

こうして、訪れる度に学ばせてもらい、日々の生活の中で何気なくしている事にも意味がある事に気づかせてもらっている。そして、仲間たちと元気でお参り出来る事も「歩き遍路」の大きな魅力だと思う。

「歩く」事には、宗教や社会的地位、肩書やお金のある無しは全く関係ない。途中で起こる悪天候やトラブルは、自分がどう対処出来るか試されている思いがする。

歩き遍路は、私が長年やってきた登山と似ている。「どうして苦しい思いをしてまで山を登るの？」とよく人に聞かれ、自問自答しながら登った事は数知れない。でも、ハアハア、ゼイゼイと喘ぎながら登った先には素晴らしい景色が必ず待っていて、自分の脚で登った人にしか味わえない、涙が出るほどの感動が、そこにはある。だから下山する時には、キツイ登りの事など、すっかり忘れ、「次は、どこに登ろうか」とワクワクするのだ。

登山から学んだ事は沢山ある。努力は裏切らない。いつかきっと自分の力や糧になる。そして、自然の中では、人間は、ちっぽけな存在で、風や光、空気は無条件に優しく包んでくれる。

まず、今の自分をしっかり見つめて自分を受け入れる。それから、自分に何が出来るのか問い、心を浄化しながら先達さんの言葉を心に刻み、一歩、一歩と結願まで自分の力を信じて歩いて行こうと思う。

毛利 弘子プロフィール

1952 年生まれ　公立小中学校養護教諭を４０年経験後 2012 年定年退職
ライフワークの性教育の講演や全国大会での研究発表多数
●受　章／平成２４年愛媛県学校保健功労賞　令和３年文部科学大臣学校保健功労賞
●執　筆／「いのちのはなしグーチョキパー」（エイデル研究所出版）
●その他／・和霊公民館運営審議委員・更生保護女性会副会長
・退職公務員連盟中央分会副会長・和霊小学校読み聞かせボランティア
・カサヨハネ（知的障害児）放課後デイサービス非常勤講師ほか
●趣　味／陶芸・登山・写真・絵手紙・歩き遍路・シーボーンアート

もうり ひろこ (著) みずせき ゆりえ (絵)
価格 1,572 円 (税込)

亥の子（南予地方全般）

―子ども主体で行う地域の年中行事り―

愛媛県歴史文化博物館　専門学芸員
大本敬久

1971年、八幡浜市生まれ
専門は民俗学・日本文化論著書に『民俗の知恵』（創風社出版）等

宇和島市吉田町の亥の子大会　　写真提供／大本敬久

亥の子とは、旧暦10月の亥の日、亥の刻に餅を食べて息災を願う中国の俗信に基づくもので、日本では平安時代以降に宮中や武士の間で行われた行事である。それが民間でも祝うようになり、稲作の収穫祝いとして、現在では多くの地区で11月に行われている。

全国的に見ると亥の子は東日本には稀で、西日本、特に中国地方、四国地方、九州北部で盛んである。その中でも愛媛県は亥の子を伝承する地区が他県に比べて圧倒的に多く、概算では現在約500地区で行われている。その中でも南予地方が盛んであり、特に宇和島市吉田町、三間町、西予市宇和町の亥の子は賑やかである。吉田町では各地区の亥の子が競演する亥の子大会も行われる程である。

子ども達が歌う亥の子唄は「祝いましょう祝いましょう、お亥の子さまをいわいましょう、一に俵を踏んまえて、二でにっこり笑うて、三で酒を造って、四つ世の中よいように、五ついつものごとくに、六つ無病息災に、七つ何事ないように、八つ屋敷をひろめたて、九つ小倉を建てならべ、十でとっておさめた」が広く知られ、めでたい亥の子唄を歌うことで家の繁盛を願い、石を搗くことで土地の悪いものを追い払う祈願行事だといえる。

亥の子では子ども達が亥の子石もしくは藁で作った棒をついてまわる。石のことを「ゴーリンサン」と呼ぶ地域もあるが、これは亥の子で祝う作神（農業神）が「降臨」することから付けられた名前とされる。亥の子行事の運営は主に子ども達が取り仕切ることが多い。ほとんどの地区では小学1年（7歳）になると子供連中に入って亥の子に参加する。年長者は小学6年もしくは中学2年、3年で、その内の一人が「亥の子大将」という責任者となって子供連中をまとめる。地区では道具（石、幟など）を保管する「亥の子宿」が毎年定められ、亥の子の実施日を通知するのも子どもの役目である。幼児から少年への変わり目である7歳から、少年から若者への変わり目である14、15歳までの集団が一つとなって、大将のもと運営されるのであり、年長者は年下の者の面倒を見て、ご祝儀の配分についても責務を持つ。子ども達はこれらの経験を通して地域の中で一人前の若者へと成長していく。家庭内でのしつけや、学年ごとに区切られた学校とは異なり、亥の子には地域による教育システムがあるとみることもできる。南予地方の多くの地区で行われる亥の子。大規模な祭りだけではなく、このような小さな年中行事に注目してはいかがだろうか。

宇和島の札所と遍路道

明石寺道

四国遍路は弘法大師空海が修行したとされる八十八の札所を巡礼するもので、その札所同士をつなぐ道のことを「遍路道」と言います。そのため遍路道とは、ある一つの道を指すものではなく、時代による変遷も見られます。

宇和島市内には第四十一番札所龍光寺と第四十二番札所仏木寺があり、遍路道として龍光寺道、仏木寺道、明石寺道の3本が通っています。その内、仏木寺道の一部が平成29年3月に、龍光寺とその上にある稲荷神社の境内が平成29年10月にそれぞれ国史跡「伊予遍路道」に指定されています。そして、令和6年2月21日に明石寺道の一部が国史跡に追加指定されました。

国史跡に指定されたということは江戸時代頃から今までほとんど変わらない場所に遍路道が残っていたということが評価されました。国遍路の原形と見られるものは平安時代末期には成立していたとされています。

『今昔物語集』巻三十一には「通四国辺地僧行不知所被打成馬語第十四」と題される説話があり、「今昔、仏ノ道ヲ行ケル僧三人伴ナヒテ四国ノ辺地ト云ハ伊予、讃岐、阿波、土佐ノ海辺の廻也」と始まります。

また、『梁塵秘抄』巻二の三百一には「われらが修行せし様は　忍辱袈裟をば肩に掛け　また笈を負ひ　衣はいつとなくしほたれて　四国の辺地をぞ常に踏む」という今様の歌があります。

これらより平安時代末期には四国の海辺を巡る道、すなわち「辺地」があり、僧などが修行に訪れていたことが読み取れます。しかし、これがそのまま現在のような遍路になったわけではありません。いつ頃札所を巡る遍路になったのか、八十八の札所になったのかは、さまざまな議論がありますが、澄禅という僧が記した遍路日記『四国遍路日記』（1653年）には八十八の札所にそれぞれ番号を付けて記されており、ほぼ現在の形となっています。

江戸時代には街道が整備された影響か遍路の数が増加し、それに伴って遍路日記や遍路案内記が記され始めます。貞享四（1687）年に僧真念が記した『四国遍路道指南』には各札所の本尊や由緒だけでなく、遍路道についても記されています。どの村を通って次の札所に至るという程度の記述ではありますが、同時代の絵図と照らし合わせることで、当時どのような道を通っていたか推定することができます。

先述のとおり宇和島市内には、龍光寺道、仏木寺道、明石寺道の三本の遍路道があります。龍光寺道は愛南町にある第四十番札所観自在寺から龍光寺までの道ですが、海沿いを通る「灘道」、古くは藩主や幕府の使いが通ったという「中道」、番外札所である篠山神社を通る「篠山道」の三本があります。明和六（1769）年に宇和島藩が遍路の規制をした際には、篠山詣をする遍路は篠山道を、そうでない遍路は灘道を通るよう指定され、中道の通行は禁止されていました。

いずれの道でも番外札所である満願寺で一度合流し、満願寺を出てからは野井坂か松尾峠を越えて宇和島城下に入り、窓峠を越えて旧三間町域に入ります。窓峠越えは現在の県道57号広見三間宇和島線と大きくは変わっていません。龍光寺からは龍光寺の裏山を越えて仏木寺へ至り、仏木寺から明石寺までは歯長峠を越える山道になります。

宇和島市にある2箇所の札所の内、龍光寺は江戸時代まで稲荷神社が札所として記されていました。元は稲荷神社と一体であったためか龍光寺の山号は「稲荷山」といいます。先述の遍路日記や遍路案内記でも四十一番として「いなり」の名前が見られ、札所までの道中に立つ道標でも同様に記されています。しかし、江戸時代には龍光寺が存在していなかったというわけではなく、稲荷神社を管理する別当寺（神社を管理するために置かれた寺）としてありました。江戸時代の頃は、まだ神と仏は同一のもの

安藤　裕之
宇和島市教育委員会
文化・スポーツ課

であるという、神仏習合の考え方が残っていたので、稲荷神の本地仏（神が仏として現した姿）として十一面観音菩薩が祀られていました。覆い屋に覆われている稲荷神社の本殿は、江戸時代中期から残るもので市指定の文化財になっています。その一部には神社の本殿でありながら、仏教の道具である輪宝が彫刻されており、神仏習合の要素がわかりやすく残されています。

稲荷神社本殿の蟇股に彫刻された輪宝

その後、明治時代に入ると神仏分離政策が進められ、神社と寺院が明確に分けられることとなりました。その際に札所が龍光寺へ移り、今に至っています。

仏木寺は、山号を一カ山（カは王偏に果）といいます。この山号には仏木寺成立の由来が大きく関わっています。空海は留学していた唐から日本へ帰国する時に、日本で密教を広めるための道場を求めて三鈷杵と呼ばれる道具を投げました。これが高野山の松に引っ掛かっていたため高野山を真言密教の道場としたというのは有名な話です。その際に三鈷杵だけでなく一カの宝珠を投げており、空海が四国巡行の際にクスノキに掛かっているのを見つけて、大日如来を彫り、お堂を建てて仏木寺としました。

この大日如来の眉間にその宝珠を埋めたことから「一カ山」と名付けられたといいます。現在仏木寺に残る大日如来は、この時のものではありませんが、建治元（1275）年から彫り始めたという胎内銘が残るもので、県指定文化財になっています。

宇和島市内には先に挙げた2箇所の札所の外に2箇所の番外札所があり、また市内ではありませんが市町境近辺には番外札所の篠山神社があります。篠山神社は観自在寺の奥の院です。篠山神社も当初は神仏習合の神社で古くは観世音寺という寺院もありましたが、明治の廃仏毀釈（仏を廃し、釈迦の教えを棄てること）運動によって観世音寺は廃寺となり篠山神社だけが残りました。

篠山神社は、すべての遍路が参拝するというわけではなく、第三十八番札所金剛福寺から第三十九番札所延光寺までの間に月山神社を参拝した遍路は篠山へは参らず、月山神社参りをしなかった場合、篠山詣をしていたようです。

宇和島市内に残る番外札所の内、1箇所は津島町岩渕にある満願寺です。境内の上段、大師堂の隣には県指定天然記念物となっている二重柿があります。二重柿とは実の中にもう一つ実を付けるというもので、空海が諸国を巡り歩いた際に杖を立てて置いたのが芽を出し、根を張ってこの二重柿になったという伝説が残ります。観自在寺から龍光寺へ至る遍路道は三本ありますが、いずれの道でも満願寺にたどり着き、お参りをしていたようです。

もう1箇所の番外札所は天神町にある龍光院です。龍光院の開山は伊達秀宗が宇和島に入部した元和元（1615）年で、この頃はまだ番外札所ではありませんでした。元々は現在も九島にのこる「鯨大師」願成寺が観自在寺の奥の院としてありましたが、海を渡って九島まで行くことは大変であったため、宇和島城下の入り口に拝所が設けられました。これは現在元結掛にある「馬目木大師」です。寛永八（1631）年には願成寺の名前も移され、『四国遍路道指南』でも「城下の町入口願成寺」と記されています。この馬目木大師が明治時代に龍光院へ合祀され、遍路が龍光院へ参拝するようになりました。

四国遍路は必ずしも第一番札所から始める必要はありません。また、今年は閏年であり、逆打ち（札所を第八十八番から逆回りで巡ること）をすると利益が増大するという話もあります。これを機に遍路巡りをしてみてはいかがでしょうか。

宇和島市内の遍路道（国土地理院　地理院地図を基に作成）

医療
health care

災害時の医療

1月1日に能登半島で発生した地震は、死者及び災害関連死が250人以上、避難者も3万人を超えるなど、甚大な被害をもたらしました。平成30年の西日本豪雨では宇和島市も吉田町を中心に多くの方が被災しました。災害はいつ起こるかわかりません。

災害が起きると医療の需要と供給のバランスが崩れます。多くの負傷者が生じる一方で医療側も施設やスタッフの被災などで通常の方法では対処できない状況となります。災害時には通常の方法で医療を行えないため、通常診療のルールから変更が必要になることをご理解下さい。災害時の医療の目標は、避けられた災害死を最小限にすることです。多数の傷病者が同時に発生しているときには、治療が必要な人を選び出して優先順位を決定する事が必要になります（トリアージ）。

災害が起きた時には、次の方針で医療が行われます。災害発生時に必要なことは被害状況の把握です。広域災害救急医療情報システム（EMIS）にて、被災地域に必要な医療・救護・看護を提供するための情報が収集・集約・提供されます。

各医療機関では情報をもとに、可能な範囲内での医療が行われます。各医療圏内に災害拠点病院が指定されています。災害拠点病院は電気や医療品、食料を確保しており、医療チームの派遣や災害時の受け入れや搬送、災害医療を行う病院などの後方医療機関を支援する機能があります。宇和島保健医療圏では、市立宇和島病院が指定されています。

災害地域内での医療機関だけでは対応できない場合、災害派遣医療チーム（DMAT）が派遣されます。DMATは災害発生直後に現場に入り、負傷者の緊急治療などの活動ができるように訓練された医療チームです。急性期に現場に派遣され、応急治療や重症患者の医療機関への搬送、現地の病院支援などの活動を開始します。また診療だけでなく、災害医療の組織作りも行います。被災地で十分な医療が行えない場合には、被災地外の災害拠点病院などに搬送が行われます。DMATの活動は3日ほどで終了しますが、被災地の医療体制が回復しない場合には、日本医師会災害医療チーム（JMAT）がDMATと交替し、医療支援が続けられます。また、災害ストレス等による精神的問題や、被災地の精神保健医療機能低下に対処するため、災害派遣精神医療チーム（DPAT）が派遣されます。

南海トラフ地震の確率は30年以内に70％とも言われています。行政を中心に対策は行われつつありますが、災害発生時に計画通りに支援が行われる保証はありません。大切なのは一人一人の準備と心構えです。災害に備えて、家具の固定、避難場所や連絡法の確認、水や簡易トイレなどの防災備蓄品や非常用持ち出し品の準備などができているか、再度確認して下さい。応急処置や心肺蘇生を習得しておくことも大切です。宇和島消防署で定期的に普通救命講習会が行われています。＊

宇和島地区　広域事務組合　消防本部
＊https://www.119.uwajima.nanpu.or.jp/course.html

沖内科クリニック
副院長 沖　良隆

食めぐり

宇和島 蒋淵の岩牡蠣について

宇和島市の南西に位置する三浦半島、その突端に蒋淵という集落があります。市内からおおよそ40分程度、美しい海を眺めながらのドライブで辿り着く自然豊かな場所です。今回は、この蒋淵で、これから旬を迎える岩牡蠣を養殖している島津さんをご紹介します。

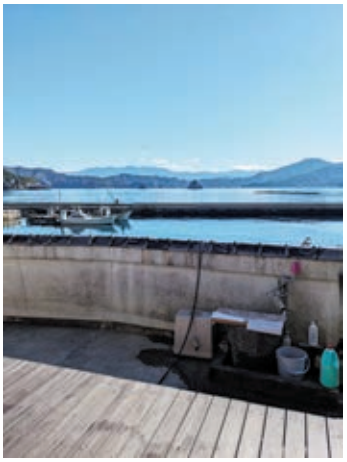
子ども達に魚食教育を行うシーフードマイスターの島津さん。ご主人と二人三脚で、岩牡蠣を養殖しています。お料理の達人！

蒋淵の岩牡蠣養殖は、今から10年前の真珠母貝の大量死をきっかけに新たな産業として始まりました。宇和海は太平洋からの黒潮の流入により、岩牡蠣のエサとなるプランクトンが豊富であることから、現在に至っては3Lサイズの巨大岩牡蠣も育っているそうです。

手塩にかけて育てられた岩牡蠣は、臭みがなく濃厚な味わいです。遠方から食べに来られるお客様が増えてきたことから、今年は出荷の最盛期に合わせて、民泊も準備されています。

「漁家民宿 manma うみ人やま」

テラスから美しい景色を眺めながら、こころゆくまで岩牡蠣を楽しむ場所…日常を忘れて蒋淵を存分に満喫し、心癒される時間を過ごせることでしょう。



【岩牡蠣の栄養】

冬が旬の真牡蠣は「海のミルク」、夏が旬の岩牡蠣はそれよりも濃厚な味わいなので「海のチーズ」と形容されています。どちらも、ミネラル、タウリン、グリコーゲンなど、健康維持に役立つ栄養素が豊富に含まれます。

◎漁家民宿
manma
うみ人やま

◎蒋淵岩牡蠣
養殖組合

岩牡蠣のかんたんグラタン

（材　料） 2人分

岩牡蠣	6個
たまねぎ	1/4個
生クリーム	大さじ2
ピザ用チーズ	30g
パン粉	大さじ2
バター	少々
サラダ油	適量
ピザ用チーズ	30g

（作り方）

① タマネギは、みじん切りにする。
② 耐熱皿に岩牡蠣の身を並べ、①のタマネギ、生クリーム、ピザ用チーズ、パン粉、5㎜角に切ったバターの順にのせる。（生クリームは、コーヒーフレッシュや牛乳で代用可。バターはマーガリンで代用可）
③ 200℃に温めたオーブンで20分ほど焼く。（表面のパン粉が、きつね色になるくらい）

（レンチン！岩牡蠣の開き方）

殻の丸みがある方を下にして耐熱皿にのせ、ラップをしてから、500Wのレンジで1個につき2～3分間加熱します。殻の口が空いた所からナイフを差し込んで、貝柱を切りながら開きます。（この後、殻を皿にして上記材料をのせて焼き、グラタンにしてもよい）

和田 広美
管理栄養士
柑橘ソムリエ
シーフードマイスター
愛媛大学地域再生マネージャー

Tsunagu

お気楽 俳句

子どもから大人まで参加できる「あしらの俳句甲子園」。毎年1月の連休に松山で開催されているのをご存じでしょうか。今年も北海道から九州まで、また、海外帰省組など3人×40チームが集いました。

前夜祭の夏井いつき句会ライブと翌日の本選は、俳句という十七音に懸ける真剣な遊び。笑いと熱気に満ちた会場は大いに盛り上がりました。来年も1月11日、12日に開催決定。ぜひ貴方も！

（小野更紗）

あしらの俳句甲子園2024

前夜祭句会ライブ結果

1位　口下手の兄から鮫の歯をもらふ　水須ぽっぽ

2位　焦点の合はぬ青鮫は媚薬だ　五十嵐秀彦

2位　鱶（ふか）の眼の恍惚冬日とは何色　穂積天玲

4位　人も魚も星も群れたい冬だ　近藤幽慶

5位　杜父魚（かくぶつ）のもの問ひたげな眼に会ひぬ　朗善千津

6位　初旅や青々と澄む鮫のかほ　岸本尚毅

7位　着ぶくれや海はいつから青いのか　はぐれ栃餅

審査員優秀賞

五十嵐秀彦選　魂の誤訳凩飼ひならす　Fよしと

夏井いつき選　凩の種を頬よりはきだしぬ　正人

岸本尚毅選　窓に凩乳液の頬に伸ぶ　さゆり

あしらの一等賞

骨密度ほめられ凩を進む　いちあゆ

本選出場句より（　）内はチーム名

地震戦争湯ざめの身さえ温かく　（チームくじら雲）

下描きをはづれて雪の降る積もる　（チームくじら雲）

雪しづか本をひらけば丘のやう　（チームくじら雲）

壁越しに雪の厚みを聴く当直　（蝦夷のきのこ）

若水や母の喉（のみど）を動かせり　（蝦夷のきのこ）

若水や鯛めしの焦げ匂い立つ　（辞令は突然に）

凹凸がいくつ湯ざめの体には　（雪うさぎ）

湯ざめして他人のやうなふくらはぎ　（すいすいすい）

＊色文字が季語です

あしらの俳句甲子園サイト

ツイキャスにて
アーカイブ視聴可能
合言葉は「あしはい」

https://twitcasting.tv/ashira_haiku/archive/

＊うさす：なくす

絵：律川エレキ
1966年宇和島市生まれ　奈良市在住
2000年頃より俳句新聞や雑誌「100年俳句計画」等に挿絵を描く。映像作家

Tsunagu

おすすめの本

水車小屋のネネ

津村記久子 著　毎日新聞社 刊　￥1,980（税込）

身勝手な親元から逃げ出した年の離れた姉妹〔理佐（18歳）と律（8歳）〕が小さな町のそば屋の夫婦とそば粉を挽く水車小屋で石臼の番人をしているネネ（鳥）と共に歩む40年を5章に分けて綴る長編です。

ふたりを温かく見守ってくれた人々、そして成長したふたりが周りの人々に手を差し伸べていく日々が淡々と描かれている、希望と再生の優しい物語りです。

「2024年本屋大賞」にノミネートされた10作品中の1冊！　全国の書店員の投票で選出される、この賞も今年で21回目、4月10日に大賞発表の予定です。

ぜひ店頭で手に取ってみて下さい。

協力：**岩崎書店**　宇和島市錦町4-16　TEL. 0895-22-0528

Tsunagu

つなぐ美術館

■アトリエ堀端絵画教室（べにばら画廊）https://benibara.webhop.info/

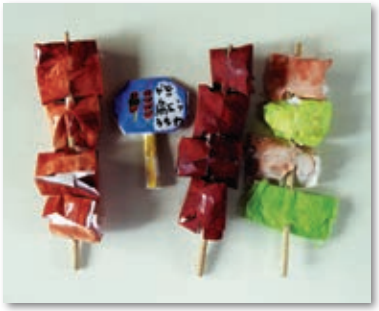
宇和島市本町追手 2-8-6　TEL. 0895-22-1104　　コメント: 吉田 淳治

作品名：『シャコ貝とガラスの浮き』（油彩）
作者：深見佳彦（大人クラス）

シャコ貝のダイナミックなフォルム。
手作業から生まれる豊かなガラス玉。
室内で描きながら異空間に放つ。
砂丘、そして遠く重なる海と空が現れた。
絵画のなせる術（わざ）、深見さんの広がり。

作品名：『自分』（水彩）
作者：吉見琉海（子どもクラス）

植物でも何でも写生が大好き。
初めて？自画像にチャレンジした。
割りばしに墨をつけて生きた線を引く。
頭、マスク、服の黒と、白壁の美対比。
るい君は自分の顔に何を見ただろう。



作品名：『やき鳥やで〜』（立体）
作者：芝夏希（子どもクラス）

昨年 12 月、焼鳥屋に行った。
以来、作り続けるヤキトリ、ヤキトリ！
気に入ったものはあきたりしない。
夢中の連続は、なつきちゃんのもつ力。
大人になってもきっと楽しい出会いが。

■アトリエぱれっと　https://art-palette.wixsite.com/mysite

宇和島市伊吹町字イカリ石甲 1083-1 2F　TEL.090-7784-4703　yuka@art-palette.com　コメント：清家由佳

作品名：『和霊神社』（アクリル）
作　者：河添　幸

宇和島で愛されている和霊様。
手前の灯籠と奥の門との遠近感が
なんとも気持ちがいい絵です。
この絵の前に立つと本当にその場
の気温や風や音が感じられます。

作品名：『のんびり』（アクリル）
作　者：渡部優一（小 4）

とても優しい色合いで動物たちの
のんびり過ごしている雰囲気が伝
わってきます。みんな、いつも優
一くんの描く絵に元気や癒しをも
らっています。これからも楽しみ
にしてます♪

作品名：『サクララン』（油絵）
作　者：清家京子

どんな作品にも一枚一枚本気で取
り組む清家さんの姿勢は本当に素
晴らしいと思います。この作品も
葉の一枚一枚の角度や厚みを何度
も何度も研究しながら描かれた姿
勢に脱帽！

うわしん若手経営塾OB

若だんな女将（おかみ）14

株式会社 ファインフードシステム　代表取締役　清家 葉子

「宇和島の食文化を100年先まで継承するために！」

祖父母が宇和島にて飲食店を開業したのが80年ほど前です。その後、父が急逝したため、30数年前に和食の店を祖父母・母から引き継ぎ飲食店の仕事をスタート致しました。12年前、その和食店の店舗名を「和風レストラン石狩」から**「旬膳・郷土膳　和日輔」**に改名しましたのは、お客様の今日が和やかな日になるようにお助けしたいとの思いからです。観光やお仕事でお越しになられたお客様には郷土料理を正しく、美味しく召し上がって頂きたい。地元のご常連のお客様には季節を感じるお料理で楽しんで頂きたいと、日々思っております。現在は、和日輔の2階に洋食店**「ビストロエビス」**、日本庭園南楽園内のレストランや道の駅

きさいや広場でも同じ思いで営業させて頂いております。

ここ数年間は、御多分に漏れず未曽有のコロナ禍に見舞われ『お客様のお困りごとには、やれることは何でもしよう』と決めました。1個からのお弁当、遠距離でもお届け、メニュー以外のご要望、何でも来い！そんな苦しい中、志高く前向きに働いて下さる社員さん・パートさん達の有難さ、会社一丸となって食で地域のお役に立つように頑張ることの大切さは、この苦難を乗り超えた今になれば、これからの会社の試金石になったと誇らしく思います。

私のこれからやるべき仕事は3つあると思っています。

一つは、もちろんご来店のお客様に美味しいお料理を最高の雰囲気とおもてなしでご提供させて頂くこと。

二つめは、冠婚葬祭など特別な日のお料理（おせち料理・お食い初め膳など）を、その儀式のしきたりやお客様の思いに沿って、お手伝いさせて頂くこと。

三つめは、世代を超えて受け継がれ、長年地域で愛され続けている宇和島の食文化（郷土料理）を守り、正しく継承していくことです。

特に三つめの食文化の継承がこれからの宇和島の飲食店の大きな課題です。郷土料理の代表選手である【宇和島鯛めし】は、文化庁より**「江戸時代から続く郷土の料理100年フード」**に認定されていて、地域団体商標も取得している由緒正しい宇和島の看板料理です。日本中に発信していくことはもちろん、これから100年先まで正しく継承していく使命があると思っています。合わせてクオリティの高い宇和島の水産物・農産物を料理にして日本中の方に召し上がって頂きたい思いも日々強くなります。

まだまだ力不足ですが、地域の皆さまのお力をお借りして、三つの仕事をやり続けていき、皆さまから愛される100年企業を目指したいと思います。

和日輔　宇和島市恵美須町1丁目2-6　TEL 0895-24-0028

お取り寄せ
オンラインショップ

うわしん「南予活性化若手経営塾」とは、宇和島信用金庫において1年間、南予地域の産業活性化をはかるために創業者や2代目、3代目の若手経営者を育成し、企業経営体質の健全化・成長のためのセミナー・個別指導・異業種交流等をおこなっていて、地域内の中小企業の経営レベルを向上させる目的で開講されています。

「小島惟謙さん、政治から日本の司法権の独立を守った偉人です。イケンの言われがこうであったのかは歴史的謎です、というかウソです。すいません。(笑)」

作者プロフィール

本名 / 城内　章　1957 年　宇和島生まれ　愛知県在住
宇和島南高等学校卒　職業 / 建設業
趣味 / 漫画イラスト作成
著書に「のらとおばあちゃんの虹」

Tosyu Hyappen

斗酒百篇

聞　牟禮鶴　　もん　むれづる

麦焼酎　減圧蒸留 25 度　※左 1800ml　右 720ml
大分県豊後大野市産麦トヨノホシ 100%
720ml 1,485 円　1800ml 2,805 円（税込）

大分県が 10 年かけて開発した焼酎麦「トヨノホシ」麹を全量使い、香りを高めるために、やさしく発酵させ減圧蒸留した焼酎です。
麦を生かして華やかで上品、聞いて華やか心も酔えるとうれしいです

牟禮鶴　壱越　いちこつ
麦焼酎　豊後伝承造り　減圧蒸留25度
720ml 1,210 円（税込）
1800ml 2,200 円（税込）

牟禮鶴　黄鐘　おうしき
麦焼酎　豊後伝承造り　常圧蒸留25度
720ml 1,320 円（税込）
1800ml 2,365 円（税込）

牟禮鶴酒造合資会社　大分県豊後大野市朝地町市

土師酒店（はし）

宇和島市広小路 2-58　☎ 0895-24-7888
営業時間：10:00 ～ 20:00　定休日：日曜日

※斗酒百篇（としゅひゃっぺん）とは　たくさんの酒を飲みながら、たくさんの詩を作ること。　古代中国の唐の時代、数多くの詩を作った李白のことを杜甫が『飲中八仙歌』の中で褒め称えた言葉。　題字／矢間大蔵

つなぐ No.26 2024年 春号 年4回発行 発行人 宇和島信用金庫 〒798-0041 宇和島市本町追手2-8-21 TEL.0895-23-7000

「つなぐ」は、こちらでどうぞ。

● 宇和島市（本庁、津島支所、吉田支所、三間支所、中央図書館、吉田図書館、中央図書館津島分館、生涯学習センター、パフィオうわじま市立宇和島病院、伊達博物館、畦地梅太郎記念美術館、歴史資料館） ● きさいや広場 ●道の駅みま ●シロシタ ● 宇和島商工会議所
● 南楽園 ● かどや（弁天町店・味奈味） ● ハイウェイレストラン宇和島 ●和日輔 ●福 DON ● 盛運汽船 ● 岩崎書店 ● 木屋旅館
● はまゆう薬局 ● ひまわり薬局 ● ＪＲ宇和島駅 ● ＪＲ松山駅 ●小野商店（津島） ●安藤コーヒー ● べにばら画廊
● アトリエぱれっと ● 香川・愛媛 せとうち旬彩館（東京） ● 宇和島信用金庫各支店 他

「つなぐ」の発行は、新春号（1月）、春号（4月）、夏号（7月）、秋号（10月）です。
※「宇和島クラブ」協賛業者 ※つなぐのバックナンバーは宇和島信用金庫のホームページでご覧いただけます

［無料］

宇和島信用金庫
―― この街が好き、この街と未来を拓く ――